

清流大川

羽地中学校
学校だより 92 号
せいのりゅうおおかわ
H30. 9.21



※写真はイメージです。

黄金波打つ羽地野に



一石は10斗(150kg)。米俵1個は4斗(60kg)。つまり一石は、米俵2.5個分です。100万石とは一石の100万倍ですね。



羽地中学校校歌の歌い出しに出てくるこの歌詞は、勿論、黄金色に染まる稲穂が一带に広がり、豊作と潤いをもたらす羽地の光景を謳ったものである。豊作となった大地に感謝し、子々孫々と繁栄していく羽地野に建つ中学校にふさわしい校歌ですね。

米は、古来から生きていくための食料のみならず、それは財産であり年貢の対象であり、米えゆく原動力であり、権力の象徴でさえあった。日本では加賀百万石などというように、米の生産量＝石高(こくだか)が大名の地位や権力を表す代名詞でもあったのだ。

一年生は、総合的な学習の時間で、そんな羽地の歴史や産業、文化を理解するために、地域巡りを実施しました。



一年生達が最初に訪れたのはライスセンター1。羽地米の生産から収穫、販売のしくみや工夫を担当の金城さんからお話を伺いました。金城さんは、事前に準備していた生徒からの質問に対しても丁寧な答えをくださいました。毎年のこと説明、本当にありがとうございました。



ライスセンターで説明を聞く羽地 Blue



大川と勘手納港



改決羽地大川碑で説明を聞く Blue Boys

ここ羽地で稲作が発達した理由の一つは、多野岳などの山々から湧き出る豊富な水があったからだ。羽地大川の豊富な水量と温暖な気候は、羽地米の二期作を可能にしたが、時としてそれは洪水を引き起こし、川が氾濫して稲作に甚大な被害をもたらし続けてきた。

そこで、安定した稲作ができるよう1969年に大川を改修したのが、蔡温と約十万人にのぼる人夫達であった。3ヶ月あまりで改修された大川ではあったが、明治に入り、山崩れなどで堤防が決壊し、たびたび改修工事が行われたようです。

一七世紀に編さんされた『琉球国高究帳』によると、羽地間切の石高(こくだか)は、1008石、うち米は、1007石なのでほとんどが稲作によるものでした。

米は仲尾次村の蔵に一時保管され、上納米として勘手納港から薩摩に出航していた。米を勘定(かんじょう)することからカナテナの名がついたのでないか。(羽地村誌より)

羽地は稲作が盛んな地域であると共に貿易の拠点である勘手納港を有していたので、物が集まり、人が集まる地域だったことがわかります。

産業や文化が発展していく土台が羽地にはあったと考えられます。次回は、古我地焼きと金川銅山巡りを紹介します。



かつての勘手納港は貿易港として栄えた



質問する羽地Boy